



「ゼミ生」となった学生たち。 右から河原崎穂香さん(新潟食 料農業大学食料産業学部2年)、 五十嵐司さん(新潟大学農学部 4年)、北川健太さん(新潟食 料農業大学食料産業学部2年)。 河原崎さん、北川さんはフード コース選択、五十嵐さんは農業 (越水害)が発生したことから、急続して加治川で大水害(下越水害・、そして水害から地域を守る治水。水機能は、工事開始直前と翌年に、理のための発電、新発田市の水道用理のための発電、新発田市の水道用)年度に完成した。目的は、加ンクリートダムで、1973(内の倉ダムは、内部に空間を設 。見学は、静かに始まった。 。到着すると、ダムの迫力 という3人は、早速、盛り 内部に空間を設け



● ダムから頭首工、農家まで

「水の流れ」を追ってみて



受ける印象が大きく違った。まず、内の倉ダムは 緑に包まれ、自然がとても豊かだった。内部や放 流バルブ付近に行って話をうかがうと、ダムの機 能や特徴に、興味深い点は多かったが、それ以上

に印象的だったのは、職員の方々がダム管理の仕 事に誇りをもって臨んでいること。実際のダムの 規模や細かい特徴、状態も、働く人たちの思いも、 現場に行かないと分からないのだと感じた。

農事組合法人「米倉村」では水利への関心の高 さが印象的だった。代表の嶋津さんの言葉からは、 内の倉ダムなどの治水・利水施設への感謝の気持 ちが、田んぼの果樹園への転用の仕方などからは 水利への関心が感じられ、心に残っている。

ダム、頭首工、利用者と、水の流れを追ってい く中で、農業という分野の広さを感じた今回。農 業に用いられる水だけを考えても、ダムや頭首工、 またダムに注ぐ水の源たる山など、そのつながり は長く、幅広い。次回の取材では排水機場に行く ということで、またそのつながりを追えるのは楽 しみだ。

作物のことが一番大切に考えられているのだなと

思った。同時に、常に利用している人や生物を考

え、みんなに笑顔を与えていると感じた。実際、

取材した皆さんは笑顔で、自分たちが行っている

ことに誇りを感じていると見えた。水の流れは安

全だけでなく、作物の栄養と幸せを送り届けてい



きたがわ けんた 北川 健太さん

内の倉ダムの見学では、ダムの 全てに驚いた。規模もだが、一番は役割。これま で思っていたのは、発電、洪水調節、河川環境の 保全、上水道だったが、今回新たに、灌漑(かんが い)という、農地に水を届ける役割があることを 知った。内の倉ダムは、農業用水補給をメインに

造られたということもあり、下流に冷たい水を流 さない設計になっていて、農家を思いやり、大事 にしていることを知った。「ダムは縁の下の力持

実際にダムの水を利用している農事組合法人 「米倉村」では、高品質なフルーツやおコメが生産 されていて、食べさせてもらったぶどうやマスカ ットは大粒でみずみずしく、格別だった。

今回、水の流れをたどってみて、農業のこと、



河原崎 穂香さん

の流れと水利施設の関わりが理解できた。新発田 市の農業用水や生活用水の原点にある内の倉ダム では、新発田市の用水の管理だけでなく、加治川 流域の大水害をきっかけに、水害から地域を守る

機能が働いているということを知った。その後、 取材にうかがった農事組合法人「米倉村」代表の 嶋津さんからも、内の倉ダムができたことで、水 害や大きな干害もなくなり、農業も生活も安定し たと聞いて、内の倉ダムがどれだけ地域に根づい ているかということや、地域のために働き、地域 に感謝される関係性に感動した。

県内各地の事業所から

信濃川左岸流域農業水利事業所

本地区では、国営信濃川左岸土地改 (昭和54年度~平成7年度)で整備さ 取水するための小千谷頭首工や、地 域の幹線用水路を改修する工事を、 平成29年度から進めています。1号 幹線用水路は、一部区間を河川(茶 郷川)と兼用しており、農業用水の 適正な管理が困難であることから、 新しく1号幹線用水路を造成し河川 と分離する工事を進めています。新

シンと呼ばれる筒状の機械で掘り進 トンネル化する工事を進めています。



関川用水土地改良建設事業所

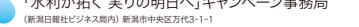
本地区には、国営関川土地改良事業 (昭和43年~昭和58年度)で造成し 東北電力(株)の水力発電所と共同 で利用している笹ヶ峰ダムや、戦国 る上江用水路、中江用水路等があり ます。施設の老朽化に伴い、平成26 年度から笹ヶ峰ダムや用水路等の改 落差を再生可能エネルギーに変換す る小水力発電所をダム直下に建設し、 その売電収益によって土地改良区の 維持管理費の軽減に役立てています。

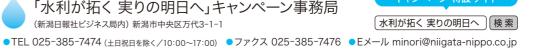


現在は、ダムの洪水吐の改修や水管 理施設の更新を進めているほか、地域 の用水の有効活用と農作業の負担軽 減のため、揚水機場の遠隔・自動運 転や末端自動給水栓を用いたICTモ デル事業の実証試験も行っています。

















◎主催/農林水産省北陸農政局 ◎共催/新潟日報社 ◎後援/新潟県、新潟県土地改良事業団体連合会、新潟県農業協同組合中央会

企画·制作/新潟日報社統合営業本部







